

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06461

研究課題名(和文)『東文選』を例とした東アジア漢字圏における辞賦受容に関する研究

研究課題名(英文)The study of "Dong Wenxuan"'s Cifu in The East Asia's chinese characters cultural area

研究代表者

栗山 雅央(MASAHIRO, KURIYAMA)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：20760458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、李氏朝鮮時代に編纂された『東文選』と題される詞花集に収められた「辞賦(長編の韻文作品)」について考察を行ったものである。研究成果としては、まず現在確認できるテキスト間の校勘を行い、その定本を定めたことにある。ついで、これを編纂する際に中国で成立した『古文真宝』を参考としていた可能性を新たに指摘した。併せて、『東文選』に収められる辞賦作品の分類を試み、1、『文選』(中国を代表する詞花集)に影響されたもの、2、日本に関する描写が認められるもの、3、律賦に属すると推測されるもの、4、李氏朝鮮王朝を讃美するものに分類できた。以上、当該書所収辞賦作品に関する初歩的研究を成し遂げた。

研究成果の概要(英文)：This study researched about the "Dong Wenxuan"'s "Cifu(Chinese poetry)" that was compiled in Joseon Dynasty. There are some research findings about that. First, through revising the text, decided standard text. Second, found the fact about "Guwen Zhenbao" influence to compile "Dong Wenxuan". Third, classified "Dong Wenxuan"'s Cifu and was divided into four classes. From the above, this study achieved at the first stage about "Dong Wenxuan" and its Cifu.

研究分野：中国文学

キーワード：『東文選』 辞賦文学 朝鮮文学 東アジア漢字圏

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中国の六朝時代に流行した辞賦文学が後世、東アジアの文学にどのような影響を与えたかについての考察を目指したものである。その背景を以下に述べる。

(1) 中国で編纂された『文選』は、中国においては唐代以降、官吏登用試験である科挙で詩賦が採用されたこともあり、科挙受験の必読書としての位置付けを獲得した。このような地位を確立した『文選』は、朝鮮及び日本へも伝わっており、それぞれの国の文学の発展に強く影響を及ぼしたとされる。例えば、日本文学に対する影響は、『枕草子』に「文は文集、文選」とあり、『徒然草』に「文は文選のあはれなる巻々」と見えることから明らかであり、その受容は平安時代以降の書物に屢々指摘されてきた。更に、日本における『文選』と同じような総集として、『本朝文粹』を挙げることができるが、これについても一定の研究の蓄積を見ることができる。

その一方で、朝鮮における『文選』の影響として、李氏朝鮮期の15世紀に編纂された『東文選』を挙げることができる。しかし、この『東文選』は朝鮮史学分野では『朝鮮王朝実録』と並んで、基礎資料として認識される書物であるが、翻って当該書に対する中国文学分野からのアプローチは殆ど皆無に等しい状態であった。

(2) 報告者はこれまで主に中国の西晋時代に創作された「賦」という中国に固有の長編の韻文作品(左思「三都賦」、上述の『文選』にも採録される)の研究を行ってきた。具体的には創作された時代、作者が置かれた立場、皇帝の関与など、創作を取り巻く社会的状況に着目して、この「賦」という文体と当該王朝との関わりについて考察した。その過程で、同じく東アジア漢字圏に属する朝鮮と日本において「賦」という文体がどのように取り扱われたかに興味を持つようになったが、日本については既にいくらかの研究の蓄積があったこともあり、朝鮮の「賦」の受容状況を考察する必要があると思い至った。とりわけ、日中朝と「賦」との関わりを考える際に、科挙と呼ばれる官吏登用試験が実施されたかが大きく関係するように思われた。科挙において「賦」の創作が課され、「律賦」と呼ばれる一文体を成すに至っているためである。この点において、「賦」を基軸とした比較文学研究の必要性が感じられた。

(3) 本研究が主に考察する『東文選』とは、近年、南京大学の張伯偉教授が主導する「域外漢籍研究」という新たな学問分野が開拓されることによって、ようやく注目され始めた書物である。したがって、これに対する中国文学分野からのアプローチは始まったばかりであり、今後の日中朝を包括した東アジア文学の様相を研究する必要性を感じた。

以上、「賦」という文体を起点として、中国・朝鮮・日本を含めた漢字を使用した文学の実相を把握することで、東アジア漢字圏という一段上の領域認識から、日中朝の文学を捉えなおそうと考えた。その際、朝鮮文学に対する中国文学からのアプローチが殆どないことから、『文選』の影響を受けたとされる『東文選』を取り上げることで、その不足を補うための基礎的研究の必要性を感じたことが、研究開始に至る背景として挙げられる。

2. 研究の目的

本研究では、『東文選』に関する研究が目的の大部分を占めるため、まず『東文選』そのものの概説を加えておく。

『東文選』一百三十巻は、李氏朝鮮王朝第九代成宗(在位 1469~1494)の九年(明、成化十四年、1478)に編纂された、朝鮮に固有の総集である。その編纂者には当時に知成均館事であった徐居正を中心に、盧思慎や姜希孟ら二十三名を数えることができる。その構成については、序文にも記載される所であるが、『文選』や『唐文粹』、『宋文鑑』や『元文類』といった中国の歴代総集に範を取ったものであり、文体の別(計五十六〔詩を一と数えれば四十八])に従って排列される。その上で本研究が設定した目的は以下の通りである。

(1) 中国文学の影響を受けた朝鮮の総集としての『東文選』の位置付けについて、従来の朝鮮史学からではなく中国文学分野からのアプローチによって、再度考え直す。

(2) 中国で古代より伝統的に創作されてきた「辞賦」が、同じく東アジア漢字圏に属する朝鮮において、どのように受け入れられ、どのように創作されたかを確認する。

(3) 東アジア漢字圏に属する中国・日本・朝鮮について、それぞれの社会的文化的背景に関する類似点や相違点を意識しつつ、本研究においては朝鮮におけるそれがどのようなであったかを確認した上で、これを文学研究の中に反映させる。

3. 研究の方法

『東文選』について、現状の研究状況の不足に鑑み、本研究をその基礎的研究として位置付け、以下の通りの研究方法を採用した。

(1) 『東文選』諸版本の調査と校勘

(2) 『東文選』編纂及び所収「辞賦」類作品に対する分析

(3) 学会発表、及び論文の刊行による研究成果の公開

4. 研究成果

(1) テキストの校勘

まず『東文選』に関する研究を進める上で、底本とすべきテキストが確立されていない状況にあることが明らかになった。そのため、現在目撃できる『東文選』テキストを蒐集した結果、次のようになった。

- 1, 豊後佐伯藩主毛利高標献上本(国立公文書館蔵)
- 2, 慶熙出版社本(慶熙出版社、一九六七。李氏朝鮮後期の木版本影印)
- 3, 名古屋市蓬左文庫蔵活字本(学東叢書第四、学習院東洋文化研究所刊、一九七〇。中宗・明宗間印成)
- 4, 朝鮮古書刊行会編『東文選』(朝鮮群書大系統々八~十四輯、朝鮮古書刊行会、一九一四)

上述の四種のうち、『東文選』の版本としては、学東叢書本、慶熙出版社本、豊後佐伯藩主毛利高標献上本の3本が該当する。学東叢書本の解説に基づけば、学東叢書本は16世紀前半の李氏朝鮮中宗・明宗間に成った活字本であり、また慶熙出版社本は李氏朝鮮後期の木版本であるとされ、本研究でもこれに従った。学東叢書本では毛利高標献上本が触れられていなかったため、当初は考察の対象としていなかった。しかし、調査の過程で国立公文書館が当該書を所蔵していることが明らかになったために、後から校勘の対象に加えた。

また、朝鮮古書刊行会本は唯一の点校本であったが、底本が明記されておらず、かつ諸版本との様々な異同が確認されたことから、資料としてさほど信頼できないと判断した。

校勘の結果としての各版本間の関係性については以下の通りである。すなわち、慶熙出版社本と毛利高標献上本は同版木を用いた、学東叢書本の模刻本と推定され、そのため諸版本間の異同は極めて少ないことが確認された。このような活字本と木版本間での異同が殆ど見られないという現象からは、『東文選』を印刷する際に慎重が期されたことを認めることができる。また、毛利高標献上本は慶熙出版社本より画質が鮮明であり、かつ文字自体の磨耗も少ないため、テキストとしてより高い価値を持つと判断した。

以上、底本としては学東叢書本を採用しつつ、学都東叢書本にも不鮮明な箇所が散見されるため、その際の主たる参照テキストとして毛利高標献上本を利用するのが適当であるかと判断した。

(2) 『東文選』編纂の際の参考資料の推定

『東文選』はその書名からも推測される通り、『文選』や『唐文粹』などの中国で編纂された総集を参考として編纂されている。こ

のこと自体は主たる編纂者であった徐居正の序文の中にも認めることができる。しかし、実際には中国の歴代総集とは異なる点も見出すことができ、具体的には「辞」と「賦」とを、総集の冒頭に置くという、部立ての排列における差違が認められた。

この点について、報告者は『古文真宝』の影響を推定した。『古文真宝』の朝鮮への伝来及び李氏朝鮮王朝での位置付けに鑑みるに、『古文真宝』が『東文選』編纂時に広く流通していたことは明らかである。かつ、徐居正も認知していたことが確認されることから、『東文選』の編纂において『古文真宝』が幾らか作用した可能性を新たに指摘した。

(3) 『東文選』所収辞賦類作品の分類

『東文選』は、巻一から巻三にかけて「辞賦」に分類される作品が採録されており、収録作品数も多くないため、以下にその一覧を示す。

巻一、「辞」…李仁老「和帰去来辞」/李穡「山中辞」/「閑志辞」/「永慨辞」/「流水辞」/「東方辞」/「自訟辞」/李崇仁「哀秋夕辞」/鄭夢周「思美人辞」/鄭道伝「江之水辞」

「賦」…金富軾「仲尼鳳賦」/「啞鷄賦」/李奎報「畏賦」/「放蟬賦」/「祖江賦」(并序)/「春望賦」/「陶嬰賦」(并序)

巻二、「賦」…崔滋「三都賦」/「相如避廉頗以先国家之急賦」/李仁老「紅桃賦」/「玉堂柏賦」/姜彰瑞「成王氛稟胎教徳与年豊賦」/鄭義「道関一和槐橘合爲兄弟賦」/李堅「春雷作龍蛇不安於蟄戸賦」/無名氏「王者之興必卜筮決天下賦」/「義於人者和於神賦」/閔漬「李勣応時掃雲大唐陽春賦」/無名氏「志士口与心誓守死無二賦」/「嗜欲皆同惟賢者節之賦」/「賈誼請獬猛敵不搏畜兔賦」/「漢成帝勿折檻以旌忠臣賦」

巻三、「賦」…尹宣佐「隋高祖非宴食不過一肉賦」/「高祖開設学校広闡道義維新宝曆賦」/「太宗觀覽尚書庶幾唐虞賦」/李穡「雪梅軒賦」/「觀魚台賦」(并序)/李達衷「礎賦」/「思亭賦」/鄭道伝「梅川賦」/李詹「墨君賦」(并序)/李與悌「大槐賦」/「新雪賦」/申叔舟「次倪謙雪霽登樓賦」/「八駿図賦」(并序)

「辞」は李仁老「和帰去来辞」を筆頭に十篇が収められ、「賦」は金富軾「仲尼鳳賦」以下三十四篇の作品が収められる。

これら『東文選』に収録される辞賦作品については、以下の4種に分類が可能であると判断した。

- 1, 『文選』の影響が確認できるもの
- 2, 日本との関係が確認されるもの
- 3, 律賦に属すると推測されるもの
- 4, 李氏朝鮮王朝の称賛を目的としたもの

以上の分類を概括すれば、上述の諸特徴は、中国と日本とに挟まれた地理的条件に基づくものであり、そこには中国との関連、日本との関連が相互に確認され、かつ朝鮮に固有の特徴として認められる。このような両国への意識は、日中朝の比較文学研究を展開する際に極めて有用である。

(4) 本研究の位置付けと今後の展望

本研究は、『東文選』に対する中国文学分野からのアプローチとしての基礎的研究としての位置付けを持つ。具体的には、『東文選』を軸とした朝鮮文学に対して、中国文学が与えた影響の実態の解明、及び朝鮮における「辞賦」作品の創作状況の確認とが挙げられる。

その上で今後の展望としては以下のものが想定される。まずは、『東文選』所収の「辞賦」類作品に対する個別的研究の展開である。これは本来であれば、本研究においても取り組む予定であったが、校勘対象となる版本が付け加えられた結果として取り組めなかった内容でもある。主には李仁老「和帰去来辞」と崔滋「三都賦」についてであるが、これらは『東文選』所収の陶淵明「帰去来辞」及び左思「三都賦」に関連するものであり、中国文学の影響を直接に被るものである。更に本研究で律賦に属すと推測されるものについても更なる分析が必要であると考えている。

また、『朝鮮文学史』に類する諸研究を確認して気付いたことであるが、その殆どにおいて『東文選』所収の辞賦作品に基づき、『東文選』編纂時の「辞賦」の水準を高く評価するが、報告者はこれには疑問を持っている。この点については朝鮮に遺される墓誌銘などを参照することで、朝鮮での文人の「辞賦」理解の実態が確認できると考えている。

更には、中国・朝鮮・日本における「辞賦」受容に関する比較文学研究も可能となり、これら比較を通じて、東アジア漢字圏という幅広い領域への視野を持った研究活動が可能となると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

栗山 雅央、後漢から両晋時期における賦注の確立について、中国文学論集、査読有、第45号、2016、12~29

〔学会発表〕(計3件)

栗山 雅央、關於在六朝以前賦注的誕生与展開過程、中国文選研究会第十二届年会暨先唐文学学术研讨会(国際学会)、2016年11月6日、福建省廈門(中国)

栗山 雅央、《東文選》所収辭賦類作品初探、第十二届國際辭賦学学术研讨会(國際学

会)、2016年10月23日、湖北省武漢・宜昌(中国)

栗山 雅央、『東文選』所収の辞賦類作品の特徴について、第289回中国文藝座談会、2016年9月17日、九州大学(福岡県福岡市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗山 雅央(KURIYAMA, Masahiro)
九州大学・人文科学研究院・専門研究員
研究者番号：20760458

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()